

再論 もうひとつの ロビンソン・クルーソーの世界

藤 田 貞 一 郎

- I 受容史瞥見——問題の所在——
- II 第三部が語る世界
- III 結論的覚書

I 受容史瞥見——問題の所在——

ロビンソン・クルーソー Robinson Crusoe は、ダニエル・デフォー Daniel Defoe (1660?~1731) が、自らが現に生きる時代を背景に、その脳裡に描きあげた、ひとつの人間像であった。著者デフォーは、多方面にわたる視野の広い博識家で、500冊以上の論著を残したと言われる。そのうちの政治経済書を中心に、約70冊に眼を通して、天川潤次郎は『デフォー研究』(未来社、1966年)を著し、主として「ブルジョワジーの代弁者」、「商人階級の擁護者」としての側面に光をあてている。デフォーは、18世紀の前半のイギリスで活躍した有能な政治・経済記者であったと言われるだけに、こうした側面の研究、またそれに関する論著を読み、かつ検討することが必要であることは、言うまでもない。が、そうした側面あるいはそれに関する論著に興味を覚えることもない人々にまで、著者デフォーの名を記憶することもなく愛読されるに至ったのが、いわゆるロビンソン・クルーソー物語であることは、周知の事実である。

「再論 もうひとつのロビンソン・クルーソーの世界」と題する拙論

は、このロビンソン・クルーソー物語の読み取り方をめぐって、展開する。デフオーの他の論著には目を通したこともないものが、おまけに覚束ない英語読解力のまま、かかる主題をとりあげることには、内心忸怩たるものがあることは否めないが、後述するように、現在の研究史の分析視角には、いかにしても同意できぬものがあり、今後のより優れた研究の登場を期待して、その捨石となることにしたい。

さてまず確認しておくべき重要な事実は、元来ダニエル・デフオーの著わしたこの物語は、三部から成り立つ著作物であり第一部『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』は1719年4月、第二部『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』は同年8月、第三部『ロビンソン・クルーソーの生涯と驚くべき冒険を通じての真面目な反省』¹が翌年に出版されていて、さらに第三部の序文の冒頭で、三部は一部と二部の所産であるというだけでなく、一部と二部がむしろ三部の所産であるとしてよい。この物語は寓話めいているが、実際の歴史物語でもあるとしていることである。

何事についても構想は、先ず問題意識 (intention) から始まり、その実行で完結すると言われるがように、私がここで読者に申しあげることとは、本巻はただ単に前二巻の所産であるだけでなく、この前二巻がむしろ本巻の所産と呼ばれて良いと言うことである。寓話は、常に教訓 (moral) のために作り出されるのであり、教訓が寓話のために作り出されるのではない。(ix ページ)

にもかかわらず、どういうものか通念の世界、研究史の世界からは、この点が脱け落ちてしまっている。筆者が本稿を草するのは、この間の事情を説明・解明したいということと、第三部すなわち、デフオーの問題意識

1 Defoe, Daniel. 1720. *Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe, with his Vision of the Angelic World*, ed. by George A. Aitken, A M S Press, New York, 1974. 以下、引用文はこれによる。本文中に該当ページを示す。

である教訓を扱った部分の内容を理解しておきたいからである。

既に述べたように、デフォーは多方面にわたる視野の広い博識家であり多作家でもあったから、その業績と人間像の評価も多様なものとならざるを得ない。16, 17世紀イギリスにおける消費社会の誕生を論じるジョオン・サースクは、「デフォーは金融的商業的企業にしか関心がなかった。ある意味でかれは千里眼の眼識力をもった抜け目のない男だった²」、と記す一方、その論述を進めるに際して、関連するデフォーの著作をロビンソン・クルーソーの物語も含めて、ところどころで幾つか引用している。

デフォーは、第二部『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』で、マダガスカル島で仲間の一人が殺害された事に対して、いかにその村を焼き払い掠奪したか、いかに女や子供を殺したかを語っているが、1717年に島での滞在16年半ぶりにロンドンに戻ったロバート・ドルーリーから得た情報³を巧みに採り入れたものと思われる。1717年に帰国したドルーリーからの情報を、1719年8月出版の第二部に早速採用するという事実からも推測し得るように、デフォーは好奇心が豊かで、多彩な能力の持主であったことは間違いないだけに、ロビンソン・クルーソー物語の三部作に限って、著者デフォーを論じることには、対象を狭く限定し過ぎるという批判が、当然予想される。だが、デフォーが多方面にわたる視野の広い博識家であったとされているだけに、この三部作に、デフォーが、彼が体現したある側面を集中して表出しているということも、十分想定し得る。先に引用した第三部の序文冒頭の表現を、想い起こしたい。

さて、それでは、かかる三部作からなるロビンソン・クルーソー物語を、後世の人々はどう受けとめて来たのであろうか。

2 ジョオン・サースク（三好洋子訳）『消費社会の誕生—近世イギリスの新企業』（東京大学出版会、1984年）14ページ。

3 藤野幸雄『赤い島 物語マダガスカルの歴史』（彩流社、1997年）43-45ページ。

M. グリーンの整理によれば、⁴こうである。

『ロビンソン・クルーソー』は、文学の主要形態のなかでも最も重要なジャンルの一つ、すなわち冒険物語というジャンルに属する作品であり、冒険物語は、歴史的にみて、我々（白人ヨーロッパ諸国……藤田注）の文学形式の中で最も重要な形式である。というのも冒険もの(adv-enture)は、1600年頃に始まり今なお終わっていない白人ヨーロッパ諸国の膨張的帝国主義動向の文学的反映であり、そして幾分はその動向を鼓吹・強化・伝達したものであったからである。(2ページ)

M. グリーンは、白人ヨーロッパ諸国の後世の人々は、ロビンソン・クルーソー物語を冒険物語として受けとめたと言う。したがって、M. グリーンは、その著『ロビンソン・クルーソー物語』を、次の文章でもって筆を起こす。

ダニエル・デフォーの小説『ロビンソン・クルーソー』は、孤独な難波者が、漂着した無人島をいかにして幸福な我が家にしたかを語った物語である。(1ページ)

さらに、こうも言う。

我々白人国家の市民は、この物語が繰り返し語られるのを好んで聴きたがった。なぜならこの物語は我々の心奥に潜在する欲望を養ってきたからである。ロビンソン物語は、我々の文化的エンジンの神話的燃料 (the mythic fuel of our cultural engine) だったのである。(4ページ)

M. グリーンは、ロビンソン物語が秘めている「十八世紀の想像力に活気を与え」(45～46ページ)、上記のような文化的要求と動向に応じさせたのは、18世紀後半のイギリスの作家たちではなく、「外国の(圏点は訳文原文の通り……藤田注)作家たち」(46ページ)であったとする。その先駆けと

4 M. グリーン (岩尾龍太郎訳)『ロビンソン・クルーソー物語』(みすず書房、1993年)。

なったのが、ルソーの『エミール』であったと言う。

〈ロビンソン物語〉の第二の事件は1762年ジャン・ジャック・ルソーが教育論『エミール』の中でデフオーの本を再解釈したときに起った。ルソーが『ロビンソン・クルーソー』を論じたことが、この本を啓蒙主義の主要テキストに仕立てたのである。（47ページ）

ルソーは、『エミール』の中で、「この物語は、あらゆるがらくたをとりわけると、その島の近くでのロビンソンの遭難にはじまり、かれを島から救い出しにきた船の到着で終わっている⁵」と記し、著者デフオーの問題意識あるいは構想から離れた、今日に至るロビンソン物語解釈の基点を明示している。

M. グリーンによると、『エミール』によって切り開かれた解釈法に従って、その後、『新ロビンソン』（1779年）、『スイスのロビンソン』（1812年）、『熟練水夫レディ』（1841年）、『火口島』（1847年）、『珊瑚島』（1858年）、『神秘の島』（1874年）、『宝島』（1883年）、『ピーター・パン』（1904年）、『太平洋の孤独』（1922年）、『蠅の王』（1954年）、『金曜日、あるいは太平洋の冥界』（1967年）が、創作されている。

このような創作動向と並行して、ロビンソン・クルーソー物語そのものが、英語版以外にフランス語・オランダ語・ドイツ語・ラテン語版などに、早くから翻訳されてもいる⁶。これらの翻訳が三部作全部にわたるものであるのかどうか、またこれらの言語以外のものもあるのかどうかは、本稿の問題意識からすると、重要な論点のひとつとなるが、今は詳しく言及するにたる準備ができていない。ただし、イスラーム教社会では、その地域の言語に、これ迄翻訳されたことはないのではなかろうか。というのは、

5 ルソー（今野一雄訳）『エミール（上）』（岩波文庫本、1995年発行版）326ページ。

6 『雄松堂新春古書在庫目録』203号（1996年）。

この物語がヨーロッパ白人の海外旅行談義の趣を備えていて、およそイスラーム教社会の人々の関心を喚起するといった内容のものではないと思われるからである。⁷最近、エドワード・W・サイードは、その著『文化と帝国主義』で、ロビンソン・クルーソーに言及し、植民地帝国を築くことになるヨーロッパ人のひとつの人物像と、とらえていることを思い合わせる時、深い興味を覚えざるを得ない。イスラーム教社会の言語に全く無知である筆者としては、識者の御教示を切に願うものである。

さて、非白人ヨーロッパ社会でありながら、白人ヨーロッパ諸国の人々と同じように、ロビンソン・クルーソー物語を、冒険物語として受け入れたのが、日本社会である。

最初にこれを訳したのは、膳所藩校遵義堂頭取の次子として文政10(1827)年に生まれた黒田行元、号して麴廬である。翻訳の時期はペリーが浦賀に來航する2・3年前、嘉永初(1848)年頃と、言われる。『漂荒紀事』と名付けられたこの訳本は、幾多の写本が作られ、新島襄もこの『漂荒紀事』を読んで、アメリカ密航の決意を固めたとされている。⁹黒田の『漂荒紀事』はオランダ語版からの重訳であるが、その訳書題名が明示するように、まさに第一部に限った冒険物語の訳本である。この点は、平田守衛編著の第二巻(1990年)、さらに飛鳥井雅道・斎藤希史編『注釈漂荒紀事』(京都大学人文科学研究所、1996年)に、目を通せば明かである。また、平田守衛も第一巻でこう記している。

原作は、『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』『ロビンソン・クルーソー反省録』の三部か

7 拙稿「『世紀末』に寄せて」『経済史研究』2号(1998年)。

8 Said, Edward W. 1994. *Culture and Imperialism*. New York: A Division of Random House.

9 平田守衛編『黒田麴廬と『漂荒紀事』第一巻』(京都大学学術出版会、1990年) ii。

らなる。第三部は、文学史、^{（ママ）}経済学史の研究者以外読むことのないもので、通常は二部までが翻訳される。『漂荒紀事』は第一部の翻訳である。（6ページ）

黒田の『漂荒紀事』は写本として流布したが、出版は明治期に入ってからのものであった。刊本の最初は、横山由清の『魯敏遜漂行紀略』で、安政4（1857）年のことである。¹⁰昭和50（1975）年に、株式会社丸井工文社が創業25周年の記念行事として、復刻本を作成しているので、比較的容易にその内容と実体を知ることができる。その翻訳書名が示唆するように、これもまた第一部に限った冒険物語の体裁となっている。しかも、児童教育を念頭にしたものであるとして、横山由清は、「附載」でこう記している。

魯敏遜のロマン、多く世に行はれ、ロユッセアユといふ人、殊に此書を、後生の為に实用あるものとし、童蒙を訓へ導きて、自ら^{ワシ}励み、自ら^{ツト}勤め、自ら^{イマシ}警戒めて、^{イヘノオキテ}家務、^{ヨノコトワザ}人事を通知せしめ、^{シラ}事物に^{モノ}接て^{ソイ}苞且ならず、^{ナリ}適宜の生産を営ミ、^{ウデマ}神を敬ひ、^{ワザ}人を親ミ、^{フザ}諸般の事業に智巧を研磨し、上下相通ずる、生々の至大なる恩恵を知るなど、^{スベ}総て童蒙を^{ソダソル}長育する良則となすべきよし、^{トア}称へけり（中略）今こゝに翻せるハ、最も省略して其大体を挙げ、児童の嬉戯に供へしものなれば、（中略）^{ツダナヒ}覽者、^{ワラ}幸ひに、^{ホフシ}其拙陋を嗤はず、一時の睡魔を駆りたまへとなむ

これによって、デフォーの三部作を一部についてのみ愛読するという、日本社会のロビンソン・クルーソー物語受容史の基本線は定まったと言える。その基本線の終着点に立つ、訳業の典型が、吉田健一の『ロビンソン漂流記』¹¹である。昭和25（1950）年12月の日付がある「後記」に、吉田

10 明治文化資料叢書刊行会（柳田泉）編『明治文化資料叢書第九巻翻訳文学編』（風間書房、1959年）4-7ページ。

11（新潮文庫、1951年）。

はこう記している。

本書には、“The Farther Adventures of Robinson Crusoe”と題する続編があって、正編が発行されたのと同じ1719年の8月に出た（正編は4月）。その筋は、本書の終りに断つてある通りで、主人公は再び航海に出ることを思い立ち、前にいた島を訪れた後に、ブラジルから東インド諸島に廻り、更に、陸路を取って支那とロシアを横断し、ドイツを通過して英国に帰って来る。これも冒険の連続である点では、正編と同じであるが、これと比較して見劣りがするのは、何と言っても、絶海の孤島に漂着して、苦心の結果、そこで人間らしい生活を営んで安住するに至るという、基本的に興味がある条件が、続編に欠けているからではないかと思う。本書を訳出するに当たっては、底本に、18世紀の英国の小説を覆刻したものの中では最も信憑するに足る、The Shakespeare Head Edition を用いた。

吉田健一が底本にした、シェークスピア・ヘッド版は、原著の一部と二部からなるもので、三部を欠くものであったらしい。吉田の言う正編が一部、続編が二部に当たる。もし、吉田が三部の原文に目を通す機会に恵まれていたら、少なくとも正編と続編という表現はしなかったと思われる。それにしても、正編・続編という表現を与え、続編は「冒険の連続である点では、正編と同じであるが、これと比較して見劣りがする」と断定するのは、黒田、横山以来の、ロビンソン・クルーソー物語受容史の基本線、すなわち通念に立っていたことに、由来することは、たしかである——三部に目を通すことがなくても、これとはちがう読みとり方があり得ることを、私は、「もうひとつのロビンソン・クルーソーの世界——我流読書ノートの試み——」¹²で、実証したつもりである——。とは言うものの、これは吉田健一にだけ責を負わせるわけにはいかないもうひとつの事情があ

12 『同志社商学』43巻4号、1992年。

る。と言うのは、吉田の底本は三部を欠いていたようだが、これは別に異とするに足らないと思われる。私が、現在の主題に能力の程も考えずに深入りすることになったのは、1945年に完全版として新たに出版された Everyman's Library のペーパーバック版の1966年出版本を手にしたことから始まるが、この完全版というのが、また三部を欠いて、一部と二部から成る代物であるからである。そうして、これに序文を寄せた Guy Pocock は、こう記している。第一部は個人たることの最初にして最後の崇高なる正当化を行い、これがルソーに深い影響を及ぼし、ルソーの著作が他の何人のそれにもまして、フランス革命に影響を与えたとしている。一方、第二部については、一級の自伝的冒険譚であるが、第一部を不朽のものとさせた天才はもはやそこには居ない、と片付け、第三部は読みづらいこともあってか、100万人に1人も読んでいないか、その名称さえ耳にしていないであろうと言う。

しかし、ポコックが、さりげなく付け加えた次の一文は見逃せない。「そうではあるが、第三部が珍本であり、また世に知られていないにもかかわらず、デフォーが第三部を重要であると考えていたという事実は、この第三部を注目に値するものたらしめている」¹³。

受容史当初から引続いた冒険物語型理解に、同じく一部に基盤を置きながらも、新たな読解法を導入したのが大塚久雄である。余りにも有名となったばかりでなく、周辺に極めて大きな影響力を及ぼすに至った「経済人ロビンソン・クルーソー」¹⁴という理解の仕方である。大塚は少年時代に平田禿木訳の『ロビンソン漂流記』で、ロビンソン・クルーソーに親しむようになったと思われるが、この出会いと第二次大戦後の日本社会の雰囲気¹⁵

13 Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*, (An Everyman Paperback, Everyman's Library, 1945) xii.

14 たとえば、大塚久雄『社会科学の方法』（岩波新書、1966年）の該当部分のみよ。

15 楠井敏朗「少年時代の久塚久雄（下）」『U. P.』311号（1998年）。

の中で、内部自給型国民経済形成に、日本の未来を託そうとした思考態度が、大塚的ロビンソン・クルーソー像を生み出させることになったと思われる。

大塚の問題意識に規定されて、拙論冒頭で引用した大著『デフオー研究』を執筆したのが天川潤次郎である。その序でこう記している。

デフオーは世界経済事情についての稀に見る博識家であり、資本主義のヴィジョンに対して極めて鋭い洞察力を持っていた。色々の非近代的残滓を残しながら、産業革命前夜においてデフオーほど中産階級意識を堅持し、徹頭徹尾ブルジョワジーのために代弁し、資本主義の前途を適確に捉えていた経済思想家は外にはないであろう。

という思考の枠組みでデフオー研究を進めるものだから、第三部に目を通した筈であるが、以下のような記述にとどまっている。

ロビンソンは「孤立的経済人」の人間類型として捉えられ易いが、デフオーが決して経済は「孤立性」において営まれると考えていた訳ではないことは『ロビンソン・クルーソー』の第三部『真面目な反省』(The Serious Reflections, 1720) 冒頭の第一章「孤独論」の副題に「孤独はわれわれを幸福にすることは決して出来ず、またクリスチャンの生活には極めて不適當なること」と明言しているのでも分かる。心は経済的独立性、独立自営、自助 (self-help) の精神の必要性を教えんとしたのである。クルーソーに象徴される自助の精神はイギリス産業革命の精神となり (以下略)。(390ページ)

天川と同じく、第三部に目を通していながら、大塚にその思考の枠組みを与えられ、身動きができていないのが、平井正穂である。平井は、第一部・第二部を¹⁶達意の名文に翻訳しているが、その訳本下巻の解説でこう記

16 『ロビンソン・クルーソー (上)』(岩波文庫, 1967年), 『ロビンソン・クルーソー (下)』(岩波文庫, 1971年)。

している。

第三部は、文学史乃至は経済史の研究者以外、今日ほとんど誰も読まない作品であるが、ロビンソン・クルーソーという人間像、さらにデフオーの考える人間像の解明のためには不可欠のものである。これは文字どおり反省録（Serious Reflections）であって、小説ではなく、ロビンソンという人間の口をかりて作者デフオーが自分の信仰・倫理・社会等に関する思索をのべたものであり、第一部・第二部へのコメントと考えることができる。この『反省録』の序文の中で、「物語が^{フニイフル}あってそこから^{モラル}教訓が作られるのではなくて、教訓があってそこから物語は作られてゆくのだ」ということが述べられている。第一部・第二部には、一貫して或る一つの主題があるのだ、ということを作作者はいたいのである。（407～408 ページ）

と、「デフオーの人間像」と副題とする「解説」の筆を起し、こういう風に記していく。

正直にいて、われわれが愛読し深い興味をそそられるのは、第一部（本書上巻）であり、しかもその中でも孤島でのロビンソンの生活の描写であることは事実である。そこでは、工作人・経済人としてのロビンソンの面目が躍如として示されており、したがって経済史家の興味と関心をそそるのは当然である。私が驚くのは、ロビンソンが厳格に数字をあげて、いつも勘定をすることである。（412 ページ）

と、述べたあと、その続きに大塚の論文の一節を引用する。訳本上巻の「はしがき」ではロビンソン・クルーソーの人間像の中に経済人の原型と宗教人の原型があると読みとったと主張する平井は、下巻の「解説」でも、こう述べている。

この^{チャリティ}愛という理念に、デフオーのあらゆる行動と思想と作品の基調がある。（420 ページ）

大塚に始まり、天川・平井に受けつがれていく視角の極致の作品が、落合幸二の『ロビンソン・クルーソーの世界』¹⁷である。

ロビンソン・クルーソーこそはまさにこうした道（近代資本主義を内からおしすすめる西洋合理主義の本質的理解への糸口……藤田注）を準備する宗教的経済人の原初型態（典型）といえるのではなからうか。章を改めてこの問題を、物語第一部と第三部《反省録》を読み進めながら考えてみたい。(181ページ)。

ここでは、第二部のロビンソン・クルーソーのその後の冒険の世界は、視野の外にある。デフォーが、第三部の序文の冒頭で、三部は一部と二部の所産であるというだけでなく、一部と二部がむしろ三部の所産であるとしてよいと、明言しているにもかかわらずである。

「大塚久雄がマルクスとウエーバーに依拠しながら正面きってロビンソンを近代社会ないし近代資本主義社会の人間類型として打ち出した」として、大塚の所論批判を通して「象徴としてのロビンソン・クルーソー」¹⁸を論じているのが、三戸公である。三戸の視野とその論理は、マルクス・ウエーバー・大塚の三者の問題意識の中にとどまる激しい空中戦を演じるのではあるが、この物語が元来・著者デフォーの一貫した構想に基づく三部作であることなどは、脳裡にないようである。

以上で略説した、白人ヨーロッパ諸国の膨張的帝国主義を反映する冒険物語型でもなく、また大塚を始祖とするピューリタン倫理に裏付けられた中産的生産者層の経済人型とも異なる理解の仕方を示したのが、川北稔¹⁹である。工業化の歴史的前提の解明を志す川北は、イギリス帝国における近世史の主要な担い手は、商人＝ジェントルマンであったとする。そうして

17 (彩流社, 1984年)。

18 『立教経済学研究』50巻1号(1996年)。

19 『工業化の歴史的前提』(岩波書店, 1983年)。

デフォーのジェントルマン概念にはかなり錯綜ないし混乱もあるが、彼の主張には、「ほぼ正確な歴史事実」が認められるとして（288～289ページ）、ロビンソン・クルーソーはそのようなジェントルマンの一類型として解すべきだとする。「伝統的な中産階級の地位に安住することを勧める父親の忠告を振り切って「海に」むかうロビンソン・クルーソーは、新・旧世代の人生観の違いを身をもって示している」（292ページ）と言う。

川北の解釈が、大塚に始まるピューリタン倫理面からのアプローチに対して、研究史上の一時期を画すことは確かであるが、『工業化の歴史的前提——帝国とジェントルマン——』という課題設定をしたために、主として環大西洋三角貿易の世界に視野が限られ、アジア前近代貿易の世界については、「東インド会社の貿易活動にかんする研究は、アジア内貿易は別にして」（327ページ）という一節があることから念頭にないわけではないが、殆ど論及していない、これが、三部構成の叙述が語るロビンソン・クルーソーの世界とはそぐわない、ジェントルマンの一類型と解する性急裡の判断を生み出したものと思われる。

川北の理解の仕方以外にも、最近、日本社会には、通説と異なる解釈例が幾つか見られるようになった。岩尾龍太郎の「ロビンソンの砦」²⁰、正木恒夫『植民地幻想——イギリス文学と非ヨーロッパ——』²¹が、それである。が、前者は「ロビンソンは、通説の健全な近代人像としてよりはむしろ、現代へと通底してゆく病的な像」と規定して、三部作の構成を全く無視した恣意的としか思えぬ解釈を下している。この岩尾の見方を、『朝日新聞』はその紙面の「学芸」欄で「刺激的で、示唆に富む」新たな見方であると、底の浅いとしか言う以外にない紹介を行なっている。また、後者

20 『現代思想』21巻2号（1993年）。

21 （みすず書房、1995年）。

22 1998年4月11日朝刊13版17面。

の正木恒夫は、第一部の環大西洋三角貿易は読みとっているが、どうしたことか、第二部のアジア前近代貿易が視野に入らない。「第三部を一応のぞいたとしても」(99ページ)という表現もあるように、三部構成の意味と第三部の内容が十分理解できていない。従って、「一種の幻想小説と考えた方が、テキストの実態に近い」(98ページ)という全く私には理解し兼ねる判断を下している。

ロビンソン・クルーソー物語解釈史の新たなうねりの最近例のひとつに前沢伸行の「ロビンソン・クルーソーの世界史」²³がある。前沢は夏目「漱石は『ロビンソン・クルーソー』を含むデフォーの作品のなかに植民地主義の契機を正しく見抜いている」(61ページ)と前置きした上で、近代主義的読解・植民地主義的読解・ポストモダンの読解の三つにわけて、諸説を整理している。大塚に代表される近代主義的読解については、「誤読・曲解」とする岩尾龍太郎説に賛意を示し(65ページ)、植民地主義的読解に好意を表す。

越智武臣や川北稔らによって批判されてきたように、イギリス近代の歴史は植民地帝国形成の歴史と切り離しては捉えることができず、またイギリスの近代化に当たっては大塚が主張したように産業資本家ではなくジェントルマン階層の役割が大きかったことなどが明らかにされている。川北の研究にしたがえば『ロビンソン・クルーソー』から読み取るべきは、カリブ海域に展開された奴隷貿易や奴隷制砂糖プランテーションがイギリスの工業化に果たした大きな役割であり、第一巻では奴隷制プランテーションの不在地主として、そして第二巻では世界をまたにかけた冒険商人としてばくだいな富を持ち帰ったロビン

23 樺山紘一・木下康彦・遠藤紳一郎『世界史へ 新しい歴史像をもとめて』(山川出版社、1998年)所収。なお、前沢論文から第三部については、講談社版『世界文学全集』の13巻に抄訳があることを知ったが、入手出来ず、わたない英語力で、この論文を認めざるを得なかったのは、残念というはかない。

ソンがやがて本国で「疑似ジェントルマン」に転身し、ジェントルマン階層とともにイギリスの工業化を推進していくであろう過程である。要するに、大塚が読み飛ばした部分にこそ、イギリス近代史の秘密を解く鍵が隠されていたということである。（71～72 ページ）

この記述から前沢は、川北がその問題意識の為に環大西洋三角貿易は、明確に認識したが、アジア前近代貿易を視野に入れていないことの欠陥に気がついていないことがわかる。「第二巻では世界をまたにかけた冒険商人としてばくだいな富を持ち帰ったロビンソンがやがて本国で「疑似ジェントルマン」に転身しジェントルマン階層とともにイギリスの工業化を推進していくであろう過程である」という、希望的観測の表現が記される所以である。

第二部の結語²⁴を引用する。

現在ここにこうやって生活しながら、私はもうこれ以上あくせくと動きまわるのはやめようと思っている。そして今まで経験したあらゆる旅よりもっと長途の旅に出る準備をしている。私は72年という、さまざまな波乱にみちた生涯をおくってきた。そして、隠退するということの価値も、平和裡に生涯を閉じるというその有難味も充分知ることができたつもりである。

ポストモダンの読解では、P. ヒュームと岩尾龍太郎の読解をとりあげているが、この読解法は第二部で記述されているアジア前近代貿易の世界、第三部の反省録を度外視した上に成り立つものであり、著者デフォーの問題意識それに構想とは無縁かつ恣意的なものであると、前沢はむしろ批判すべきであると、私は考える。前沢は、第三部の抄訳に目を通したと言っているからである。²⁵

24 平井正徳訳、岩波文庫本（下）400 ページ。

25 もっとも、抄訳が、どの程度のものであったかにもよるかも知れないが。

肥前栄一が、近刊の『社会経済史学²⁶』の「編集後記」で、小林秀雄の評論集中にあるロビンソン・クルーソー論に目を見張る思いがしたとして、こう記している。

それにしても小林によるカミュ的な「不条理人ロビンソン」像に新鮮さを感じたのは事実です。たとえそれが「経済人ロビンソン」像に取って代わるといったものであり得ないとしても、いなあり得ないがゆえにこそ、これを文学者にだけゆだねておく手はないと思いました。怖いのは思考のマンネリズムです。

II 第三部が語る世界

ともあれ、既に述べたごとく第三部に目を通すことがなくても、通説とはちがう読解法があり得ることを、人類史における国際商業の展開過程の研究史を基礎に、私は示したつもりであるが、それだけではロビンソン・クルーソー物語の解釈手続きとしては大きな欠陥を残している。そこで第三部それ自体をとりあげて、十分検討することが、次なる作業手続きとなる。先に引用した拙論「世紀末に寄せて」で、簡単に触れてはおいたが、本稿で以下、やや詳しく論ずることにする。三部全体を抄訳でなく完訳することが、先ず必要であろうが、デフォーの問題意識と構想に従って、この物語を読み解くに当って不可欠と思う部分を、以下に適宜引用することにした。

底本は、冒頭にあげた G・A・Aitken の編集になるもの——1895 年刊 (ロンドン) ——である。目次はこうなっている。

ロビンソン・クルーソーの序文

出版者 (G・A・Aitken のこと…藤田注) の序論

ロビンソン・クルーソーの真面目な反省

序

第1章 孤独について

第2章 誠実に関する小論

第3章 会話の不道德性と行為（Behaviour）の俗悪な誤ちについて

第4章 世界における宗教の現状に関する小論

第5章 摂理（Providence）の声に耳を傾けることについて

第6章 キリスト教世界と異教世界との間の釣合（Proportion）について

天使が見た世界の光景

附録

アレクサンダー・セルカーク救出に関するウッズ・ロジャーズ船長の説明

セルカークに関するスティールの説明

さて、「ロビンソン・クルーソーの序文」で、先に出版された二巻本に対して、世の人々が評する、これらは作りものなどとする、邪悪な受け取り方に反論する。この物語は寓話風（allegorical）であるが史実に基づくもの（historical）であり、他に例を見ぬ不幸な人生の、人類共通善（common good）の理想に添い、かつそれを目指す美しき再現（representation）であると、さらに力を込めて主張する。

実存者でもあり、また良く人に知られている一人の男子が居る。その人物の行動がこれら三部作の、まさに主題であり、この物語の全体ないしは大部分は、ほぼその人物を巡るものである。（x ページ）

「ロビンソン・クルーソーの冒険」は一連の現にあった人生の流れであると、その事実たることを繰り返し、次のことばで序文を終わる。

しかし、私はその点（教えの現実性如何…藤田注）については心配して

いない。と言うのは、今の時代がその頑迷固陋さが故に、前三巻本で注意深くとりあげた報告について、本巻で行なうしかるべき反省に、その耳を貸さぬとしても、人々の心がもっと暢びやかとなり、それらの人々の父祖の有した偏見が姿を消し、そして現代人の子孫は、その父祖とは異なる判断の下に立ち上り、またこの世代は、前の世代が軽視した、その同じ教えによって道徳心を養うべしと勤められ、徳(virtue)と宗教のきまり(rule)が、今よりもっと感謝のうちに、受け入れられる時代が来るであろうことがよくわかっているからである。(xiii)

「出版者の序論」で、G.A.Aitken は大方の思潮に抗して、この時期に敢えて原型の三部作を出版する理由を述べる。「賢明な読者は、作品全体の狙いと構想を、はっきりと理解するであろう」として、こう記している。

〔狙いと構想は以下の如くである。即ち〕——〔 〕内の記述は、藤田の補足以下同様——人類が曝される様々な状況を示し、また人生の途上にあつて、通例のあるいは異例の犠牲者となる人々に、疲れることを知らぬ勤勉(diligence)と努力(application)でもって困難に対処し、そうして摂理(Providence)を仰ぎ見る方途を説き、勇気づけることによって、徳と敬神の情(piety)を通して人類の改善と教化を目論見ているのであり、またそれに焦点が合わされている。(xv~xvi ページ)

そうして、こう付け加えている。

誠実さを凌駕する強欲(avarice)によって、原型を損なう要約をおこなない、本書の持ち味を傷付けた人々は、その〔企てが〕期待外れに終わったのみならず、その〔企てという〕事柄を恥ずかしく思うこととなったのである。(xvi ページ)

第1章は、人為的的苦行とか人気なき砂漠での彷徨といった、他の人間との共同性という連関をもたぬ孤独は人を幸福にすることは決して出来るも

のではない。そうした他の人間との共同性という連関の上に立つ孤独、崇高なるものの観想（contemplation of sublime things）こそがキリスト教徒のなすべきことであるとして、こう記して行く。

およそ内省というものは、胸にこたえるものであるが、ある点で、この愛しきわが身こそが生の目的である。従って、群衆と仕事の慌しさの中にあっても、人は一人であると言って差し支えない。あらゆる内省は自分自身のためであり、あらゆる喜びごとは、自分自身が楽しむのである。すなわち、悩みも悲しみも全て、一人我が身が知るのである。（2ページ）

神についての観想（divine contemplation）には、いかなる感情の動き、或いは乱れにも妨げられぬ精神の落ち着きが必要である。そうして、これは修道士くさい独居房や〔孤島への漂着のような〕無理強いされた隠棲でよりも、日常生活の場の方がはるかに享受できる。（7ページ）

孤独、宗教上ないしは哲学上の見地に基づいて理解するなら、人間界からの隠棲はごまかしに過ぎない。かかる孤独は自らが提示する目的に応ずることも、私共が果すべく命じられている宗教上の責務に応ずる能力を私共に与えることもできない。だから本来的に非宗教的でもありまた様々な点でキリスト教徒の生活と調和しない。（10ページ）

善悪を志向する全ての動き（motion）は精神にあり、ものは副次的なものだと考えるクルーソーであるが、人間が社会をなして生きる存在であり、又神への信仰を有する存在であることを、忘れない。

第1章の末尾はこうなっている。

完全なる孤独のあらゆる要素は、私共が望むならば、アラビアとリビアの砂漠、あるいは絶海の孤島の荒涼たる生活におけると同じく、人口稠密なる都市、法廷で慌しくなされる会話や勇しい対決、或いは軍

隊生活の喧噪と勤務の中でも、十分享受されるし、しかも十分なる恩寵にも恵まれよう。(15 ページ)

第2章「誠実に関する小論」は、運良く帰国できた今、過ぎ来し放浪の日々を振り返って、誠実を論じる。「犯した誤ち、とりわけその隣人になした悪事を認めなければ、人は真に誠実な人たり得ぬ」(25 ページ)として、まず「誠実総論」を展開する。すなわち、

それ〔誠実〕なくして、人はキリスト教徒にも紳士 (gentleman) にもなり得ない。貧乏だが誠実な人物、不幸ではあるが誠実な人物はあり得ても、キリスト教徒の不正直者あるいは紳士の不正直者は自己矛盾である。(27 ページ)

とした上で、誠実が現実には脆弱であること、或いは脆弱たらざるを得ぬことを、「誠実の試練について」と題して論じる。

緊急の欠乏が、誠実な人物を不正直者たらしめるのである。だから、世の中が通念(the common received notion)に従う審判者ならば、誠実だがあさましいという様な人の存在する余地はないであろう。(33~34 ページ)

悪事のために悪事を働く人などはそもそも居ないのであり、欠乏のみがそれをなさしめる。「誠実は、友情と同じく、苦難の試練を受ける」(38 ページ)として、人間の弱さを認めねばならぬとする。何物にも揺るがざる誠実な人物などどこに居よう。他人を不誠実と軽率に速断してはならぬ。愚か者 (a fool) であるから、貿易 (trade) へ参入するという冒険をするのであって、不正直者であるからではない (45 ページ)。返済の当てのないのに借金することは、道徳律に反する。借金することは、返済を約束することなのである (47 ページ)。

私が論じている誠実は、主に商業取引にかかわるものであり、そこでは、信用貸し (credit) と借金の支払が、最重要事である (48 ページ)。

「約束に当っての誠実」では、約束はしても不慮の出来事はあるものであり、そういう場合は誠実を欠くと人を責めることはできぬとする。そう述べる直前の部分では、他人の不誠実を責めるのに酷であってはならぬとも言う。

「当を得た (relative) 誠実」では、こう論じている。

誠実な人物は、その生涯全体が首尾一貫している。その行動全体に偽りがなく、かつ誠実の諸原則に合致している。この人物は両極端に走ることは決してない。(61 ページ)

第3章では、「会話こそ、人生の最も輝かしく、かつ美しき部分である」(66 ページ) と先ず述べ、この点に敏感なのは自分が孤島の生活で十二分にその欠如に苦しめられたからかも知れぬと言う。「私は、人間はことばをかわす生き物であることが、その理に叶った生活の特徴のひとつと考えるから、その身近かに適切な会話の相手に恵まれるのは、人生の至福である」(66 ページ)。そうした良き友が真面目で落ち着いた心 (a steady calm of mind)、明晰な頭脳、穏やかなものの考え方の持主であることは、誠実で宗教心のある人であることと並んで望ましい (66~67 ページ)。また「人類に至福をもたらす唯一の心の安らぎ (contentment) は、徳と正義の原理 (just principles) に基づくものである」(69 ページ) とも記している。

次に、「私共から会話の条件を失わせることについて」は、その身のこなしの良さなどを自慢たらしく語る人々のことを念頭に、こう語る。

特筆すべき悪癖 (vice) と過ぎたことば (intemperance) ——それらは、馬鹿気た行為であるのみならず、更には節度の逸脱でもある——は、私共から会話の条件を失わせる (unfit)。というのは、これらのことが、私共を皮肉屋で、気むずかしく、無愛想で、それに無作法にさせることになるからである。(72 ページ)

「1. 会話の不道徳性総論」では、この会話の不道徳性という用語に異議

を唱える人が、居るかも知れぬと断って、その趣旨を説明する。

「話が下品である、敬虔性を欠いているないしは冒瀆的である、慎みを欠いているないしは中傷好きである、或いは名誉を傷つけるものでありかつ口汚い、そういう会話は道徳に反する。(76ページ)

こういう具合に説明する背景には、言葉の力は、大きなものであって、人類は腕っ節をもってと同じく舌先三寸でも悪事をなすことができるという考え方があった。

そこで、「2. 会話の誤ちを是正する事」を論じ、悪癖是正の為に厳格な法を執行する必要を語り、人々にこの時代の悪癖の実態を知らしめる必要を説く。が、是正の、即ち人間本性に相応しい徳の源たる神や摂理を考察する「神学は自分の能力に余り、またそもそも自分の職業になりそうもない」(82ページ)と記している。

「3. 無神論的・冒瀆的談議について」では、無神論・反無神論の併存する現状を念頭にしつつこう言っている。

「私共はかくもひどい不信心がはびこり過ぎている時代に生きているけれども、信仰心 (religion) が確言され、神の御名が認められ、かつ敬われ、キリスト教とその教義が確立している場所で生きている。そうであるからして、この場所は、公共の平和 (public peace) が海賊・盗賊それに侵略者から守られるべきであると同じく、市民の力 (civil power) でもって、無神論者・理神論者それに異教徒の恐るべき侵略から保護されるべきである。(89ページ)

この発言のやや後、政府や王への悪口は処罰されるのに、瀆神がまかり通るのは不可解とも述べている。

「4. わいせつで、慎みを欠く談議」では、猥談はソドム (男色) であるとして、こう論じる。

「猥談は、慣習と良識 (decency) に対する罪業であると思われる。と

いうのは、どうして言葉が、造物主の顔を赤らめるものや行ないを、せせせとあばかねばならぬのだろうか。しかも、こうしたものや行ないを、もとはどうであるにしる、慣習はひたすらひめごと (privacy) や表立たぬ場に置いて来ているのだから。(93 ページ)

「嘘言について」では、嘘言の行き着く果は、それを自らが信じるようになることであり、同じ話をその場その場で手を代え品を代え語り、そのあげくは、話をもっともらしくする。しかし、寓話 (parable) は、真理をもて遊ぶものとは全く異なり、あらかじめの構想に従って、十分教訓上の正当な目的に合わせており、道德律が適切に適用されている。「ロビンソン・クルーソー」物語はそうしたものである、として、最後の段階でこう付け加えている。

誰かがここで、この著作のこれ迄の二巻は非難されるに値する、また私がそこで自ら公やけにした物語は批判されるに値するように思われるとして、異議を唱えるとしても、かかる人はそのような稀有な物語 (mystery) がその全貌を明らかにする、事の結末を見るまでは、批判を差し控えて貰いたいと正しく願うものである。(103 ページ)

第4章では、ロビンソン・クルーソーの世界見聞談が略述される。第一部と第二部で詳述した地域と偶像崇拜の愚かさ、それにリスボンでの異端審問のことなどがとりあげられている。中国社会批判を繰り返して、中国の爆薬・銃をあざけり笑う。

世界の大部分、想像を越えるはるかに広い地域が、人間本性の最低の退廃、しかり野蠻生活に落ちているのである。そこではまさに、獣の生活が食物を得る為にあるように、人生の主たる目的は単に飲み食いすること、つまり食物を得ることのみあるように思われる。それらの中にはさほどのちがひもない。(107 ページ)

これを総論として、ここで、第一部でも第二部でも一切とりあげて来な

かった、イスラーム教批判が、初めて登場する。イスラーム世界では宗教はビラム (biram) とラマダーンすなわち饗宴と断食にとどまっているなどとして、こう酷評する。

一方でクルアーンを朗読し、他方で洗淨 (washings) や潔め (purifications) をして宗教の実践を取り繕うのであり、さらに言えば、話すことといえば、蕃性と野蕃な慣行で、もち切りである。だから社会も、人間性 (humanity) も、相互の信頼もないし、相互間の会話もない。

(112 ページ)

「宗教上の差異」では、何故に教義が全ての人が誤解することのない明確な用語で述べられていないのかと、問う。宗教上の分裂の根は種々であり、これはキリスト教に限られる運命ではなく、預言者ムハンマドについてはペルシア人とトルコ人は異なった解釈を行ない、こうした例は他にも多くある。しかし、キリスト教に関しては「天上では、宗教上のこの世の差異の全ては和解することになる」(156 ページ) と、私は今、主張したいと、クルソーは記す。

「禁止の命法 (戒律) に基づく宗教とその徳 (Negative Religion and Negative Virtue) の驚くべき特質について」では、「一言にしていえば、〔悪事をせぬというような〕禁止の徳は、明らかな悪徳である」(158 ページ) と断言する。禁止の命法に立つ宗教のあり方、禁止の徳のあり方を批判するのは、人は欠陥を有するものであり、全体で判断すべきだという論拠に立つからであるとする。要するに旧約的神観を批判し、キリスト教を称揚する。第5章では、先ずこう語っている。

私は靈魂についての迷信的で懐疑的な世界観——それらについては、後で本書か他の何らかの著作で、別に論じるつもりであるが——を危避するけれども、つまり私は懐疑論者などでは毛頭ないのだが、この世を導きかつ司る摂理の見えざる手 (invisible hand of Providence)

が、神秘的な力でもって同じくこの世界を感化しているということについては、疑わざるを得ない。（183 ページ）

と一旦は述べはするが、考察を重ねこの疑念を退ける。

こういうものごとを全面的に無視することは、一種の事実上の無神論、あるいは、神の見えざる手（His invisible hand）が、私共にふりかかるもの事には全てかわりがあることを考慮しない、一種の、神（Heaven）を軽蔑した生き方であると、私は考える。（191 ページ）

第6章では、キリスト教世界と異教世界について再説する。地球上のかんりの地点が、武器・海軍艦船・植民地・プランテーション、或いはその製造所・宣教師団・居住地などにより、現在はキリスト教勢力とその王侯たちの統治下ないしはそれらの勢力とその商業の影響の下にあることを認めた上で、こう述べる。

しかし、私は、私共はこの〔上述の〕事態を指して、メシア（Messiah）の王国が全ての民族（nations）の上に称揚され、福音（Gospel）が地球の涯まで耳にされるべきであるという、メシアへの約束を、果していると考えらるべきであるとは言いたくない。というのは、私は、私共は神（God）が私共をそういう旅に出させないでほしいと望んでいると、言わんとして来た——とは言え決して神を冒瀆するものでない——からである。（207 ページ）

彼のこうした発言の前提のひとつとして、ヨーロッパよりも広い、非キリスト教世界の存在という認識があった。南米と同じく北米にも原住民は多数という認識²⁷があった。従って、「私は、宗教は剣によって根付かせられるべきであるという考えは、さほど持っていない」（217 ページ）とも、

27 ルソーも『エミール』の中で、よく似た認識を記している。「人類の三分の二はユダヤ教徒でもマホメット教徒でもキリスト教徒でもないし、モーセとかイエス・キリストとかマホメットとかの話を一ちども聞いたことのない人間が何百万いることだろう。」岩波文庫本中巻 202 ページ。

発言する。更にこうも言う。

異教の民が征服され、偶像と寺院 (temples) が破壊され、またその偶像信仰がなくなるようにと望むけれども、でもキリストを信じないからといって、人を処罰したり迫害したりする考え方からは、私は程遠い所に立って居る。というのは、聖書が言うように、信仰は神からの贈り物であると信ずるならば、いかなるキリスト教の根拠に基づいて、神がその人に与えもしなかったものを、その人物が実践しなかったからとして、どうして、私共は処罰したり、迫害したりできよう、ということだからである。従って、人々をキリスト教のあれやこれやの特定の信仰告白に従うように強制することは、私にとっては、不信心であり、かつ非キリスト教的に写る。(222~223 ページ)

第6章の最後はこうなっている。すなわち、イエスキリストに全世界が従う日は近いと言う人もいるが、「私は、これまでの旅と〔旅で得た〕知見 (illuminations) の中でさようなことを見聞しなかったし、否、ただの一語も耳にしていない」(235 ページ) という一節で、「反省録」をひとまず閉じている。

「天使が見た世界の光景」では、「詳細に検討すると、使徒ですら〔いわんや人々は〕、始めのうちは、何ともまあ無知であったことよと、驚かざるを得ぬ」(239 ページ) と記す。また、他人と数々の惑星が居住可能であるという通念をめぐって長く語り合ったことから、自らが宇宙の旅した気になり、その感想を述べるくだりが来る。そこで、「まず、この想像の旅 (imaginary travels) で、空中に打ちあげられた時、これが、私が気づいた最初の重要事でしたが、それはすなわち、この世界とそのまわりのことは全ていかにも小さなものであるということでした」(261 ページ) と語る。次に太陽系の数々の星について言及し、地球だけが生存可能と思えると判断する (263~265 ページ)。そして、「人類が、近視眼の被造物であり、目

前のものしか見えないことこそ幸福なのだ」(275 ページ) と言い、神 (God) も悪魔 (devil) も存在しないという考え方を戒め、常識の重要性を強調した上で (295~312 ページ)、こう結ぶ。

一言にして言えば、[ここで述べた] 全てこれらのことは、私どもに、現世の最も微細な種々の事がらにも聖なる摂理という偉大なる監督の存在を、見えざる世界、靈魂の實在、それに私どもとそれらのものとの間を結ぶ認識能力と言ったものについての明かな現存を、確信させることになるのである。(314 ページ)

「附録」では、アレクサンダー・セルカークの孤島での生活記録——これが有名な第一部の資料となっていることは周知のところ——が叙述されるが、最後の一節はこうである。

このありふれた人間の物語 (plain man's story) は、己の欲するものを、本来必要とするものに限る人間が、一番幸福なのであることの記憶すべき一例である。そうして、欲望を増加させる人間は、その取得するものに比例して、不足感をつのらせるのである。あるいは、当人自らの表現を使えば、“私には今は 800 ポンドの財産があるが、17 フェージングの財産もなかった時ほどの幸福感もない”。(328 ページ)

Ⅲ 結論的覚書

以上、第三部冒頭にある著者デフォーの、本書の問題意識と構想に従って、第三部の要点・精髓と思われるものを抜粋した。この抜粋からも読み取り得るものを前提にする時、はじめて、第二部冒頭で、ベッドフォード州での農園生活のくだりあげて、「悪徳もなく不安もなく、老人は苦を、若者は惑いを感じず」とする一節、第二部の末尾での「隠退するということの価値も、平和裡に生涯を閉じるというその有難味も充分知ることがで

きたつもりである」とする一節の表現と小説作法上のその配置が、陸離として光彩を放つ。これを前沢伸行のひそみに習えば、モラリスト的読解が可能である。

モラリストに関する塩川徹也の²⁸解説を引用したい。

モラリストは自らの信奉する倫理規範を高く揚げ、それに従って人間のふるまいの善悪を裁断する道德家ではない。最終的には当為としての倫理に強烈な関心を寄せているにしても、彼はそれを表面に出さず、具体的な生活の場における人間の行動とその動機を観察・分析することによって、人間精神のあり方を探究する。したがって教訓的意図がある場合でも、徳目を並べたり理想的人間を提示するよりは、むしろ現実のあるがままの人間の描写に意を注ぐ。だからこそモラリスト文学においては心理分析が重要な役割を果たし、また表現面では人間の性格を巧みに素描する〈肖像〉、さらには風刺がしばしば愛用されるのである。

モラリストの名称は、通例は16～18世紀フランスに輩出した人物群に冠せられるようだが、プルタルコス・セネカなどの古典古代の人生論の著者にも適用されることがあるとされているので、17世紀から18世紀にかけて生きたイギリス人デフォーに冠することも、また許されて良いのではなかろうか。

視野の広い博識家デフォーが生きた時代は、人類史の今日に至る一大転機の時に当たっていた。「17世紀半ば以降、インド洋貿易をめぐる西ヨーロッパ諸国の新しい進出によって、既存のイスラム世界の国際商業ネットワーク構造は解体して、代ってヨーロッパを主軸とした世界経済の成立が告知される²⁹」時でもあり、新大陸と東方からもたらされた物産によつて、

28 平凡社『大百科事典』14, (1985年)。

29 家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業』(岩波書店, 1991年) 441ページ。

ユーラシア大陸の両端であるヨーロッパと日本で、川勝平太の言う物産複合が画期的に転換する時期でもあった。³⁰

かかる一大転機に生き、多才な才能に恵まれたデフォーは、モラリストの側面をも表出して、人類史の画期的な転換期における選択肢の多様性をも示そうとしていたように筆者には思われる。それにしても、著者デフォーの意図とは異なった読解法で、後世の人々の心に大きな影響を及ぼすところに、いわゆる『ロビンソン・クルーソー物語』の、人類史におけるすぐれた古典のひとつたる所以があることはたしかである。また、そうした異なった読解法を支えた条件が、まさにヨーロッパ近代が切り開き構築した人類の歩みであったと、筆者は考える。

（附記）

近世・近代・現代にわたる日本経済史の専攻者にすぎない身で、かかる主題をとりあげた事は、無暴のそしりを免れまい。英文学専攻者の、これに関する論稿にほとんど目を通していないからである。しかし、経済史畑でのロビンソン・クルーソー理解には、どうしても納得・安住し得ないものがあり、この拳となった。もしや、この拙論に何らかの取り柄があるとすれば、忌憚ない御批判と御教示をたまわりたいと切に願っている。

（1999年12月1日）

（追記）脱稿後、初校の段階になって、ディヴィッド・ブルーエット（ダニエル・デフォー研究会訳）『『ロビンソン・クルーソー』挿絵物語——近代西洋の二百年（1719-1920）——』（関西大学出版会、（1998年11月1

30 川勝平太「日本の工業化をめぐる外圧とアジア間競争」浜下武志・川勝平太編『アジア交易圏と日本工業化1500-1900』（リポレポート、1994年）165-169ページ。

日発行)を入手・利用することが出来た。未だ十分に読み通していないが、本稿の主題にとっても極めて重要な研究成果である。が、本稿の議論には採り入れる時間がなかった。次回三度びにわたって、この主題をとり扱うことが出来れば、是非利用したい文献である。しかし、第三部を視野に入れ、国際商業網の変革・交替に留意し、モラリスト的読解が可能とする本稿の分析視角は、私の問題提起として、もうひとつの読解法を主張し、江湖の批判を仰ぐ資格はあろうと考えている。

(1999年1月31日)

(なお追記)再校の段階で、『『ロビンソン・クルーソー』挿絵物語』を通読し終えたので、本稿との関連で、該書にみる重要な指摘を二点追記する。ひとつは、「ロビンソン・クルーソーはきわめて数少ない、おそらく唯一の、西洋文化の本物の現代神話である。ほかの偉大な神話的人物、ドン・ファンやファウストには何世紀にもさかのぼる原型がある。しかし、ロビンソン・クルーソーは自分から生まれ出たものであり、ダニエル・デフォーが、おそらくスコットランドの船乗りアレキサンダー・セルカークの話に触発され、このすばらしい物語を書き上げるまでは何も存在していなかった」(iv-v ページ)。もうひとつは、挿絵は第一部と第二部について沢山描かれたが、第三部は題材としなかった。その歴史的事実に規定されて、該書は第三部の解釈は一切行っていない。

(1999年2月14日)